

33

「口乾」と「口渴」について

渡部 栄輝

日本鍼灸研究会

【緒言】「口乾」と「口渴」の違いについて、『景岳全書』では卷四十五・痘瘡・泄瀉に「乾与渴不同，渴者欲飲，乾者不欲飲」，卷一・十問篇・八問渴に「問其渴否，則曰口渴，問其欲湯水否，則曰不欲，蓋其内無邪火……此口乾也，非口渴也」とあるように，喉の渴きの有無に求めている。但し，漢代以前からこのような明確な認識があった訳ではない。「口乾」は、『陰陽十一脈灸経』（以下、『陰陽』）と『脈書』では齒脈（後の手陽明脈）の経脈病證とされ、『素問』（運氣七篇を除く）と『靈枢』では「口中乾」「口燥」とも表記されている。一方「口渴」は、『陰陽』と『脈書』では臂少陰脈の経脈病證に見える「喎渴」と、『素問』奇病論の「消渴」1条を除けば，ただ「渴」と記述されるのみで，「口」を伴うことはない。以上をふまえ，漢代以前における両者の認識について検討する。

【口乾（口中乾，口燥）】『素問』では，熱論2条（以下，S31と略。諸篇同じ），評熱病論（S33），風論2条（S42），厥論（S45），繆刺論（S63）の5篇7条，『靈枢』では，経脈（L10），熱病4条（L23）の2篇5条に見える。熱病（S31，L23），風病（S33，S42），厥病（S45）に因る症状として把握され，経脈病證は、『陰陽』と『脈書』以来の手陽明（L10）の変調に，足少陰（S31，S45），手少陽（S63，L23）が加わる。五臓との関係をうかがわせる明解な記述はないものの，間接的に心（L23）と腎（S33，L23）との関わりを見て取ることができる。

【渴（口渴）】『素問』では，診要経終論（S16），脈要精微論（S17），熱論2条（S31），刺熱篇（S32），評熱病論（S33），瘡論4条（S35），刺瘡篇（S36），拳痛論（S39），風論（S42），痿論2条（S44），奇病論（S47），刺禁論（S52）の12篇17条，『靈枢』では，邪氣蔵府病形（L4），終始（L9），経脈2条（L10），厥病（L24），雜病（L26），玉版（L60），五味（L63）の7篇8条に見える。熱病（S31，S32），瘡（S35，S36，L26），風病（S33，S42），痿病（S44）に伴う症状とされ，経脈病證は，手少陰（L10）に，新たに足少陰（S31），手太陰（L10）が加わるほか，足太陽（S32），足少陽（S36），手陽明（L26）も挙げられている。蔵府との関連は，肝脈（S17），心脈（L4），小腸熱（S39），脾熱（S44，S47），胃乾（S44：脾熱に因る，L63：鹹に因る），腎熱（S32，S44）など多様であるが，蔵府が熱に侵されるか，蔵府の（虚）熱に因り発症することから，根底には熱があることがうかがえる。陽盛陰虚して内外ともに熱するためとする論（S35）もこれと同様である。この他に，刺鍼の可否の判定（S52，L9）や過誤（S16，S33），予後の順逆（L60）でも，「渴」が指標の一つとなっている。なお，「熱病が少陰に至る」（S31），「腎風を誤治する」（S33），「漏風を病む」（S42）場合には，「口乾（舌を含む）」と「渴」が併発する。

【結語】①「口乾」と「渴」に共通する病の機序は，主に外邪性の熱により陰（蔵府，経脈では特に足少陰脈）が傷られ，津液不足に陥ることにある。②但し，「口乾」は経脈のみであるが，「渴」は蔵府との関係性も明確であることから，後者の方がより病が深く重いと認識されている。③『陰陽』『脈書』に由来する経脈病證の敷衍では，共に足少陰脈と手陽明脈を加えるも，「渴」はさらに2陰経を増して，病の重さの相違が意識されている。④病の軽重の認識から，両者の併発は，「口乾」の進んだ状態とも見なせる。⑤「口乾」「渴」の併用例から見て，「渴」は文字通り渴きのみで，後代の病證である「口乾」を含む「口渴」とは自ずから異なることがわかる。